



このすみやまじょう

兵庫県 此隅山城 一発掘された但馬山名氏の守護所一

此隅山城とは？

山名氏は室町時代に十一か国もの守護を務め、「六分一衆」と称された室町幕府最大の勢力でした。その山名氏が15世紀末に但馬の支配拠点として守護所を置いたのが、兵庫県豊岡市出石町の此隅山一帯でした。

この出石には、但馬国一ノ宮の出石神社があり、奈良時代には但馬国府も置かれたとみられ、山名氏は但馬国の伝統的な中心地に守護所を移すことで、国内の支配をより強固なものにしようとしたのかもしれませんが。

此隅山城と守護館

此隅山城は、標高140mほどの独立した低丘陵に築かれた山城です。山頂及びそこから派生する尾根上に曲輪や堀をつくり、守りを固めています。なかには、南北朝時代に遡る古い曲輪も存在する可能性があります。現在の姿となったのは山名氏の最末期である16世紀後半と考えられています。

また、城西側の山麓に「御屋敷」という地名が残っており、そこに守護館が営まれたと考えられます。写真2の手前側の水田部分が守護館の屋敷跡や堀などが発見された宮内堀脇遺跡です。

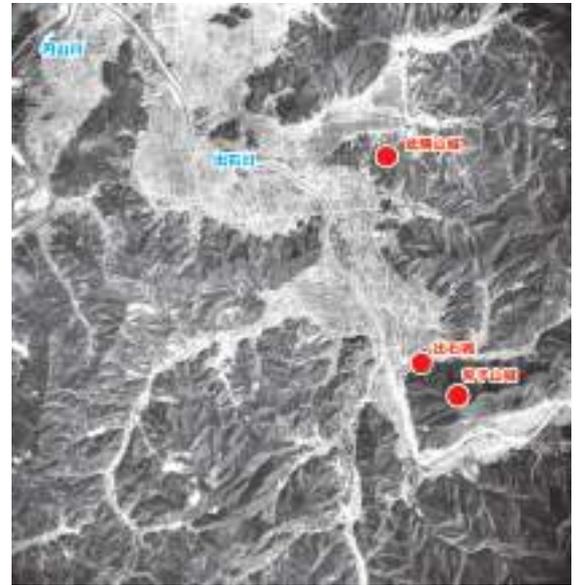


写真1 此隅山城の位置

写真：国土地理院



図1 此隅山城の復元イラスト

作画：吉田順一氏



図2 山名氏守護所の復元イラスト

作画：吉田順一氏



写真2 此隅山城の遠景

写真：兵庫県立考古博物館蔵

宮内堀脇遺跡の発掘調査

此隅山城の西麓に位置する宮内堀脇遺跡では、平成7年から5年間にわたり兵庫県教育委員会により発掘調査が行われ、山名氏の守護所の様子が明かとなりました。

15世紀末から16世紀後半にかけての武家屋敷の建物跡や、その外側を囲う堀と土塁などが発見され、輸入陶磁器や国産陶磁器、漆器、武器、武具など山名氏の守護としての権威を象徴する出土品も数多く出土しています。

武家屋敷の大型建物跡

宮内堀脇遺跡で見つかった武家屋敷の礎石建物で、桁(けた)行(ゆき)9.7m、梁(はり)行(ゆき)5間(7.5m)、総床面積72.7㎡を超える大型の建物跡です。瓦は出土していないので茅葺と考えられますが、畳が出土し、畳敷きの部屋が存在したと考えられています。

武家屋敷を囲む堀と土塁

宮内堀脇遺跡の発掘調査から、守護所は一辺200m程の規模を持つ方形居館であった可能性があります。写真は屋敷地を二重に囲むように発見された堀と土塁です。守護所の前面には、強固な防御施設が構築されていたことが分かります。

参考資料

天神山城—因幡山名氏の守護所—

鳥取県東部の因幡国も山名氏の一族が代々守護を務めていました。その因幡山名氏が守護所を置いたのが、湖山池のほとりに位置する布施天神山城です。絵図は、後世に描かれた『因幡民談記』のもので、天守閣など本来、存在しないものも描かれています。

城の麓の内堀で囲まれた範囲には守護館が営まれたとみられ、守護所のあり方は此隅山城とよく似ています。



写真3 宮内堀脇遺跡の発掘調査の様子
写真：兵庫県立考古博物館蔵



写真4 武家屋敷の大型建物跡
写真：兵庫県立考古博物館蔵



写真5 武家屋敷を囲む堀と土塁
写真：兵庫県立考古博物館蔵

図3 『因幡民談記』に描かれた天神山城の絵図
鳥取県立博物館蔵